



金融財政

2006年(平成18年) 4月17日(月) 第9740号 (購読料金 月額税込み5,565円)

「格差社会」の今昔

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



敬服する故網野善彦氏の「日本の歴史をよみなおす」(ちくま学芸文庫)を一字通り読み直して

たら、次のような個所が目にとまった。

「縄文時代の平均余命は17歳といわれており、大変に苛烈な状態に人びとはおかれていた(ネアンデルタール人も同様)。縄文人の骨の中に、明らかに身体障害者と見られる人の骨、たとえば尻唇とか、足の障害のある人の骨とかが、残っていた。人間が生きているということ自体非常に大変な時期であり、人間そのものが非常に大切だったので、そうした差別はなかったのではないかと考えています」

弥生時代以降についても同様で、建前で見ると、共同体では、人々を熱心に法制度に取り込む姿勢が見られた。

一般に中世では貧富、男女、職種などあらゆる分野で差別、格差がなく平等であったというのが、中世史研究では周知のようである。それが封建体制に移行すると、階級、権力の健在化とともに、差別や格差が明確になってくる。

翻って現在の日本では、史上空前の大規模景気到来の渦中にある。その中で、時の宰相の格差問題発言をめぐり、疑義も上がり、関心を高めている。もちろん現代の格差論は身体的障害との格差ではなく、健常で正規収入を上げる人間と、それ以外の人間との間の格差である。

史上初めて経験する少子高齢化社会というのは、人間が生きていくこと自体が大変な時期、人間を大切にしなければならぬ時代に入ったという思考転換が必要であろう。つまり中世と似た状況にあるといつてよい。人間を大切にしないと国家体制は維持できない。これが歴史から学んだ教訓である。

共稼ぎ世帯が過半数を超えた現在、女性には、子供を産み、就業継続ができる社会環境が緊急に必要である。他方、高齢者には能力に応じた社会参加の場が準備されること。若者には、ニート、フリーターが人生のスタートであってはならないという強い決意で、国家が人生設計への手助けをすべきである。

こうした実行に当たり、宰相が断固とした決意をもって、国家存続のための施策を呼び掛けることが前提である。

CONTENTS

- 解説 影落とす「政治」要因、米「住宅」の先行き次第(田島弘一)……………2
- 金融引き締めへ動く世界、揺れる市場の行方
- BANCO 株価と地価(額賀 信)……………3
- 照一隅 間違いだらけの例え話(新雪)……………5
- マーケットレーダー 外準世界一のインパクト(牧野義司)……………9
- News Eye 相次ぐ預金金利引き上げの「効果」……………10
- 拍子木 日本の利上げと国際均衡(庸順然子)……………11
- 解説 バブル期と異なる「上昇」、背景に景気2極化(宮坂恒治)……………14
- 06年地価公示に見る地価動向……………14
- あと・らんだむ(神崎倫一)……………15
- 翔んでけスポーツ(谷口源太郎)……………18
- News Eye 地域金融再編の狭間で一島根益田信用組合……………19
- 北風・南風 殖産・山形しあわせ銀(山形)……………20